

## 5. 外部評価

の先駆的実践として全国的にも注目され、98年、99年と学校への訪問者が一段と増加した。総合人間科の成果は、際だって目に見えるものではないが、父母からも一定に評価されている。

98年6月学校教育法一部改正が行われ、中高一貫の「中等教育学校」設置が可能となり、同時に中等教育学校に準じて、中高一貫教育を施すことができる併設型中学校、併設型高等学校の設置も可能となった。附属学校は、この併設型の中高一貫校を目指すことになり、その概算要求のための「名古屋大学教育学部附属中・高等学校の併設型中学校・高等学校の創設計画（案）—個性輝く豊かな教育の創造—」は、学部教官と附属学校教官が協力・共同して作成している。現在の研究開発における目玉の一つである「ヒューマンプログラム」の一環としての「ソーシャルライフ」の実

践は、この計画書で案として述べられていたものである。この概算要求も念頭に置きつつ、99年2月には『1998年度附属学校自己点検・自己評価報告書「個性輝く中高一貫教育」』を発表している。2000年2月附属学校主催の中等教育研究協議会における公開授業は、総合人間科のより一層の発展を目指した取り組みであったといえる。

現在は、以上のような実践をより豊かな内容のものとして、また併設型中高一貫校のモデル校として発展させているといえよう。また、当時も今日も引き続き、研究科・学部教官の研究・教育のフィールドとして、附属学校が活用されていることも忘れてはならない。(2001年度 附属学校自己点検・自己評価報告書より転載しました)

## 公開授業を参観しての所感

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 田 畑 治

平成6～7年度 附属学校長

### 1. 参観した授業について

私が参観した公開授業は、高校1年の総合人間科「生命と環境Ⅱ—自分を見つめ、共生を考える」であった。何故にこの授業の参観に行ったかは、いくつかの訳があるが、とにかくこの授業にいた。ちょっと“覗いてみる”つもりが、休憩を挟んだ100分に全て釘付けになった。参観者の当方にも、魅力を引きつける何かがあった。

私が、教室に向いたときは、すでに生徒たちは総合人間科の研究発表を始めていた。これには、一瞬の遅れをとった自分が問題である。本来は、授業開始前に趣き、個々の生徒の事前の様子や行動が観察できたはずであった。既に生徒は自分たちの取り組んだ課題テーマについて、発表していた。その取り組みを行っていたクラスは『ライフスタイル改善特別委員会』という国会ないし議会の特別委員会であった。生徒らは、議長団が2名、各党の議員団（与党、野党）が34名という構成であった。各党・各会派は6党であり、各グループはほぼ6名からなっていた。各党の名称がなかなかふるっており、「医療最強軍団党」「新生活党」「パーフェクトライフ党」「ハートフレンド党」「福祉意識改善党」「合併党」であった。どこかの国の利権を行使する党など見られない。

①生徒が主役で展開しているということ。これは、既

に“総合人間科”で定着しているという喜びのような感じが湧いてきていた。教師は、後方で記録係のようなことをやっていた。これは、まさに“生徒による、生徒のための、生徒の授業ないし学習”であった。

②結局、最後まで引き付けられたことは、生徒の動きである。私に関心を寄せて参観したことは、以下のようなことである。つまり生徒は自分の発表が終わると、“ノルマ”を終えた感じになり、私語や無関心が出てしまいがちであるが、そういうことが無かった。これは驚きであった。というのも、発表を終了した生徒たちは、今度は他のグループの発表に耳や目を向けたことであった。もちろん、その有り様は、生徒個人個人のペースで他の発表に臨んでいた。男子も女子も和気あいあいと話し合いが進んでいき、時にはユーモラスな雰囲気になる。つまり、発表する、聴く、確認する、質問する、答弁する、小グループで協議するなど、なかなか興味ある姿が伺えた。質問に対して、他党をけなしたり、小馬鹿にした態度で答弁するようなことは見られなかった。もしこれが身に付いていけば、学校外（家庭、地域など）で、相当な知恵や活力になるはずである。

③取上げたテーマ：これには「医療技術問題」「過労死問題」「共働き問題」「(少子・高齢者)福祉問題」

「リサイクル問題」など、まさに現在、生命と環境をめぐる切実な課題を取り上げてきて、立法化を図ろうとしていた。幸いに、時間切れで、採決には至らなかった。まだまだ審議の時間がもっと必要であった。そうして問題や課題の本質や困難さが見えてくるはずである。

- ④今後の課題として、これらの取り組みの結果や評価を、生徒たちが、どのように行っていくかは、興味があるがその先は不明である。生徒が人生を自分で拓いていく力になることを願うものである。さらに今後の展開を知りたいと思っている。

## 2. 高・大一貫をつなぐもの

この総合人間科は、生徒に今後の生活・行動の基盤になる思考や態度を身につけさせていくと確信し、また羨ましくもあった。ちなみに私が、この1年間、20名足らずの構成で「基礎ゼミ」授業をもったが、学生の取り組みには、高校の生徒たちの他人の意見を“我がことのように聴く”ことは、目標であったが、なかなか出来にくかったことを思いつつ、教室を後にした。(平成13年度 文部科学省研究開発学校研究開発実施報告書 第2年次より転載しました)

## 名古屋大学教育学部附属中・高等学校の教育力

名古屋大学大学院教育発達科学研究科 吉田俊和

### 新しい時代を先取りした教育理念

昨年度より、研究開発学校運営指導委員を引き受けていますが、最初に開発課題である「高大の連携」を生かした「青年期のキャリア形成」—総合的学習の発展を軸とした併設型中高一貫カリキュラムの開発—を目にした時、「何をやるのかな?」と思いましたが、それまでの先駆的な総合的学習研究を生かし、「生徒の自己概念形成と進路の自己決定」を目指しているのかなと感じました。これに、中高一貫、高大連携という附属学校の特色を生かした味付けがうまく生かされていけば、これからの中等教育に必要な方向性を提言できるのではないかと、とも思いました。

実際、大学で教えている多くの教員が感じていることは、「学ぶ意欲」の欠如した学生や「不確な自己像」をもった学生が増大していることである。もちろん、大学教育にも多少の問題はあるが、主たる原因は、中等教育までの「教育の在り方」にあると考えられる。最近、週5日制に伴う授業時間の減少は学力低下問題を引き起こすという主張があるが、授業時間を増やしても学ぶ意欲がなければ同じであり、家庭での自発的学習時間は限りなくゼロになる。一定の必要知識を強制的に付けさせたいなら、「落第制度」を導入した方が効果的であろう。豊かさや学歴が結びついていると信じられていた時代には、「競争」が原動力となって中等教育は支えられていた。しかし、競争しなくても大学へ入れるし、学歴は神話に過ぎないことが露呈してしまうと、中等教育を支えていた土台が崩れ始めたのである。それに替わるものが、「自ら学ぶ意欲」であり、「生きる力をつける」教育であろう。

附属学校が平成7年度から取り組んできた「総合人間科」は、新しい時代を先取りした授業であり、それを発展させている今回のカリキュラム開発には、大いに期待している。「総合人間科」を始めた頃は、必ずしも全教員が教育理念を共有していないのではないかという風潮もあったが、7年の歳月を経て、その懸念も薄らいでいる。新しく加わった中学校での選択プロジェクト、高校での新教科群は、既存の教科とうまく融合できれば、生徒の「学ぶ意欲」や「進路の自己決定」に大いに役立つはずである。

### こころの教育

中高一貫教育のもう一つの利点として、「人の行動のしくみ」、「対人関係」、「集団や社会」に関して得られた社会心理学や教育心理学の知見を、生徒に体験的に教えることにより、社会的コンピテンス(対人関係能力、集団や社会に対する自律的適応力等)や社会志向性を高めるための授業プログラムが開発されていることである。「ソーシャルライフ」と命名された授業では、教える側の価値観を押しつけるのではなく、人間の行動に関する事実を提示し、それをもとに生徒が自分たちで理解を深めていくことを目的としている。すなわち、授業自体は、生徒の「考える能力」を刺激することであり、結果として、社会的コンピテンスや社会志向性を高めることが目的である。

この考え方は、対象が「アカデミック」なものから「ソーシャル」に替わっているだけで、自ら考えて生きる力をつけていく、という点では総合人間科の考え方や軌を一にしている。筆者自身は、平成12年度から